源氏物語繪抄 全

近江八景乃和歌

頭書源氏講釋入

源氏物語繪盡大意抄

重

溪齋英泉画

書肆 井泉堂梓

九州帝大図書

近江八景
石山の
秋月

比良暮雪
堅田落雁
矢橋帰帆

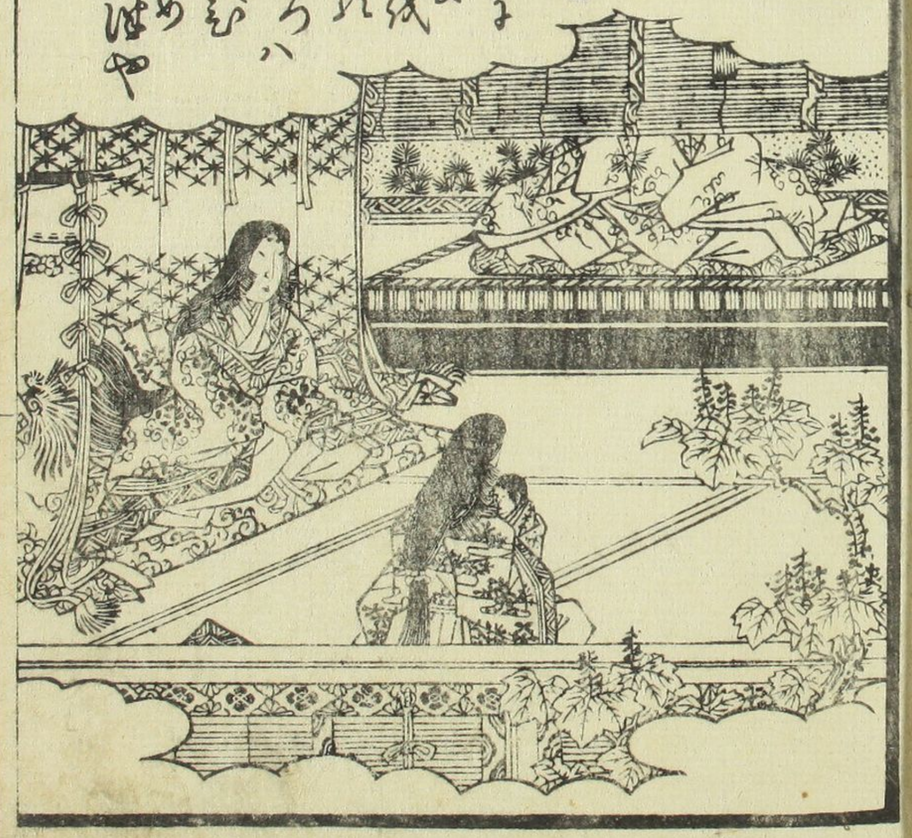
唐崎夜雨
三井晩鐘
粟津晴嵐
瀬田夕照

此源氏物語の事ら。往昔より貴賤となく人々の好める故他書
ふ誠ら。さればこの道の先達心切ふ。さはぐ中ら註解をなす。
ら書籍牛に千棟ら充ふ不怪。其志しるべらるべ
いへども。其年文ぶと濱昇の事かゆく。亦濱ら中ら解
すべきし又ら。まく故人の注釋せる。河海。明星。孟津。岷江
雜記。萬水。湖月。のたぐひ。考數多き大部の品ら要よりつくべ。
十帖をさふ源氏。篇の摘句。紹巴好。忍草。等ゆて問ふ合ふ
まらふ。をまくをまくを考ふらくしく。賢ん寸るもたゞら。
五十世帖の續を写し。画上ふ一首のうたをあげて児童の眼ふ
ふまるべ。所物語のゆゑ。ら物ら多ら多ら

天保丁酉冬再版

李園主人誌

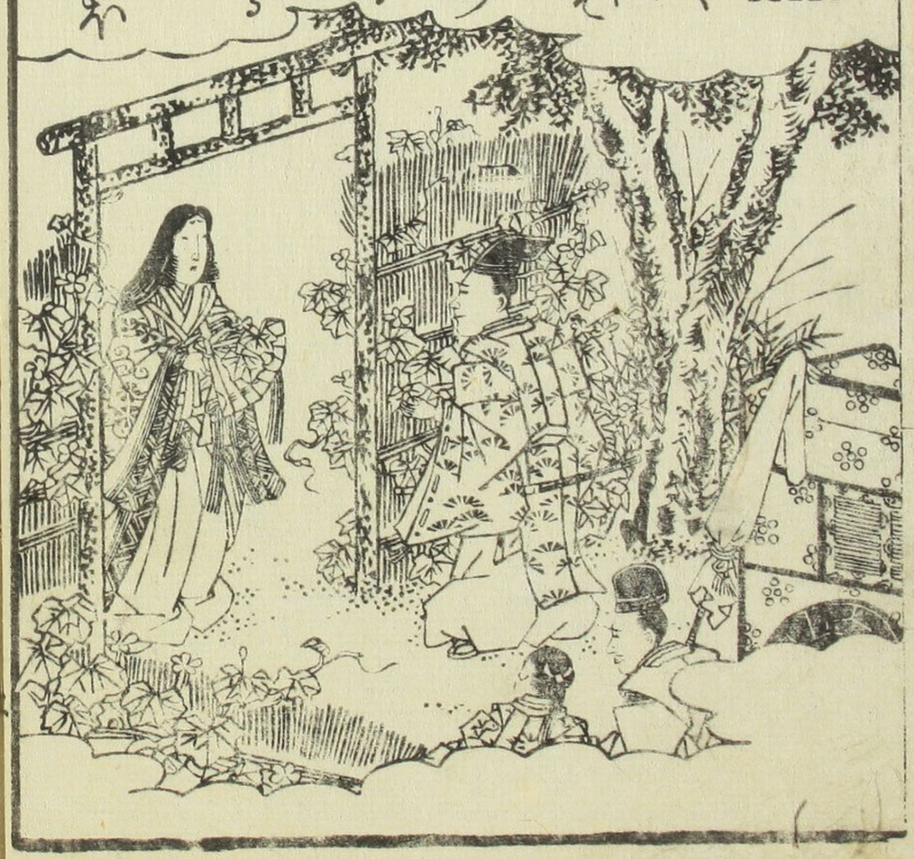
式源氏ものがたりの事ハいろ〳〵ある説
むらしらより生くなる
らべ河海抄の説
あハふ〳〵の宮尤大
臣高明公安和二年
ぶぎゝの權のそつふ
左せんせらまあハ
ら〳〵後式紀をきゝ
き時よりあまとそ
まつりて異ふびき
なるあら大齋院
より上東門院へ
めづらるる事ゝ
付ることゝ百十余
なひらるふらつば



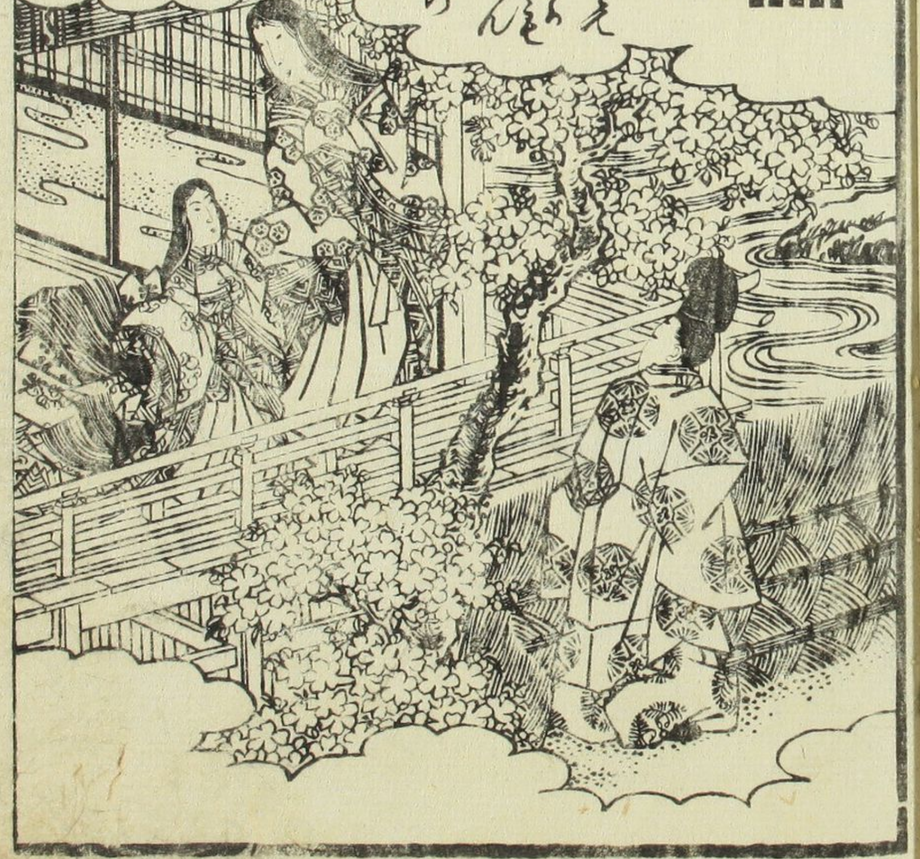
あけとりせうのふる
ぶるのの行りハ月
ゐまとく　ゐりろか
らぶ人くの耳目を
おどろかせどのるる
どもをあくろ〳〵く
はくりまつけてゐ
てまろるべきこう戒
式部ふ作せらま
けまべまみいち石
山寺小通夜して
式事をひのりやふ
折しも八月十五歌
の月湖水ふうろり
くおのづくろろろの
まくくくるまふ絵

行のくゐの空ふてり
そひてゐのふうび
ろるをのとまとぬ先
ふとそ佛前ふあり
ける大般若のおりと
をかゐるふやうけ
てまゐ須デ四石の
ふまゐ紙をかたどゐ
ろりまとゐ須デの
巻ふとひ八十五歌
ゐりりとおやー
いでとう行ーとや
ゐ法やどまちてぎい
ゐろうさんげのなり
大般若経一部六百
巻をとづろろかき

うつして女房にけるが今ハ石山ちかハりとの光源氏を九大原ハ六条の宮を
きさきぶがうちが対ハよ
そこ〳〵周公旦白居易のいハ〳〵をんぐ在納言黄巫相
の方〳〵をうちひ
さかきもの〳〵る成じ
そもそもうり次ぎハ元
くゝ〳〵又十四帖ハ
ゐ〳〵なり〳〵を
権大納言秋成ハ清
書せきせそこまた秘蔵
ハかゐ也

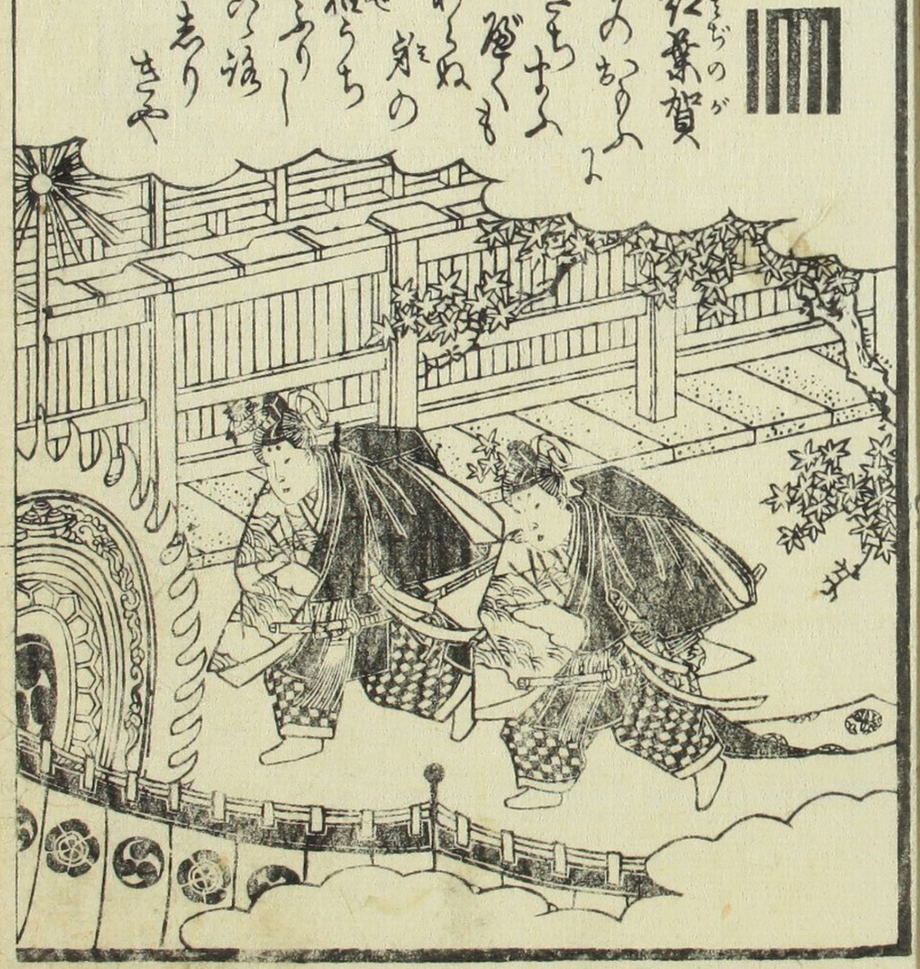


法成寺の〳〵殿員奥
書を加へらるそいつく
紙物語世ハ皆式部が
作とのこゝろ〳〵り老比
丘筆を加へる所なり
と云〳〵
誠ハ君父のもじり
仁義の道好父の躾善
悪の御ハいつるまゝ
まをのもぢといふ
ゐ〳〵
そのかもまこ荘子の
寓言ハいとゝきめ
ありあとゞのよう老
きさハひるゐ〳〵一部
の中ハ紙の上のゐを



きよづまてうにいでゝ
ゆきの式部の名を
あらゝめて紫式部と
号せり是なり
一説に云紫式部の名も
うばんゆうぞとて後に
花の花のゆりに紫の
字に改めゝ云〻
或説に云一条の院の后
ゆのとどりと東門院
へまゐらせらるゝとて
ゆりのものゝあられと
いひしをもとに后
ひろふにより式部名
とものつり
石山に参ゐらして

すはわ〻の表を
八月十五夜の月ゆ水に
うつして物語の〻ぶい
宮にうゝぶを見れば
さるかと仏前の経
文をひるゞして
との後に実ゆきとて
用ひざるとゝり
大般若経一部を書
て神社に奉ぬ
るゝ〻と云〻
須磨の巻に源氏の
させんの子をうゝる
ゆ八西の宮の左大臣
言明公云〻
式説信〻〻て



世系八氏物ごとり八寛
弘のそどめふつゝとも
いつり冷泉院の安和
二年より寛弘元年
まで三十六年ゝり後
式部卿少ゝりまと
こそまりて男ひめげ
きるは女ばこまと
バ八十年ゆもかゝぶ
ゞ

紫式部日記八寛弘
六年の記なれバ八十
八年ゝり三ゝるゆも
後宣孝ゆ嫁して大
弐の三位をうむゞき
ゆ遠いん

又云定家ゝの詞ゆ
欲ゆゝりゝるくよもも
のとゝりくゝものゝ
八何のつゝこもゝと
いつり古今寒動ゆ
ゝこゝ

ゝ

ゝ

久かつのく出ふそん
ぜうそく人もあるべ
又聖主賢臣ありぶ
ゐぜうくうける所
ふ叶はぞして罪を元
とくばゐや地獄ふ
入るなり源氏の物
語ふ事ありしハ父
ふ付くいづ又何の
ゐぞ白兵新左の淀
舟ふ乗りしもある
朋友ふ付て何のゐぞ
夕雲雀のふくりハ
とりふまゐ人ふ似と
まどゐぎりハ落葉の
宮ふ乗りしもくれ

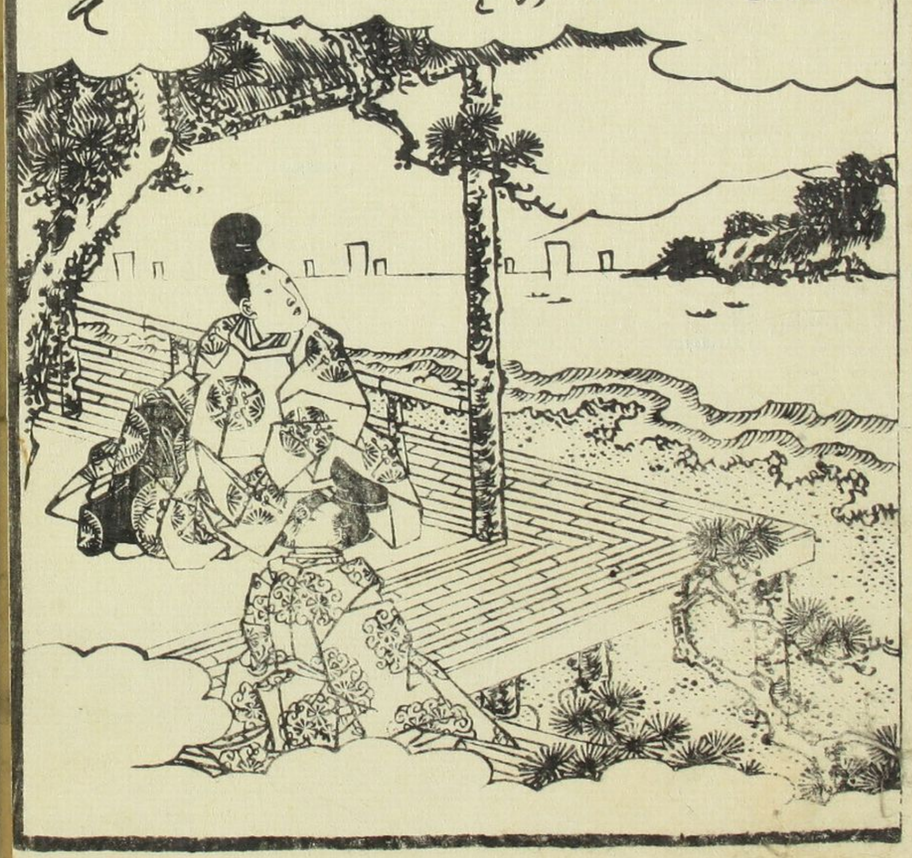
神垣ハ
ちくしの
杉もあれ
ものゝ
いろふ
まぐく
をまる
さるき
ぞ

末の昊ふ後ちくうをの
宇治の中君の白兵
部ゐの宮ふもちらま
ての後ぐ〳〵あるべ
まーも罪をこちら
ぞ春秋の褒貶ハ君
人の君ハ悪人の悪行
を面くふ書ーてあ
まハよーうまハあし
しーとゐをてまぐあを
勅旨懲悪あまーう
ゐまと武拍子ハ一人の上
ふ君悪あびまーぶまる
事をちるせり何でま
まを春秋ふ比せん
武拍子を作まる所代の

花散里
なちるものの
香を
あつーを
わとてきと
見ちる
さる紙
多ぶ
てぞ
とく

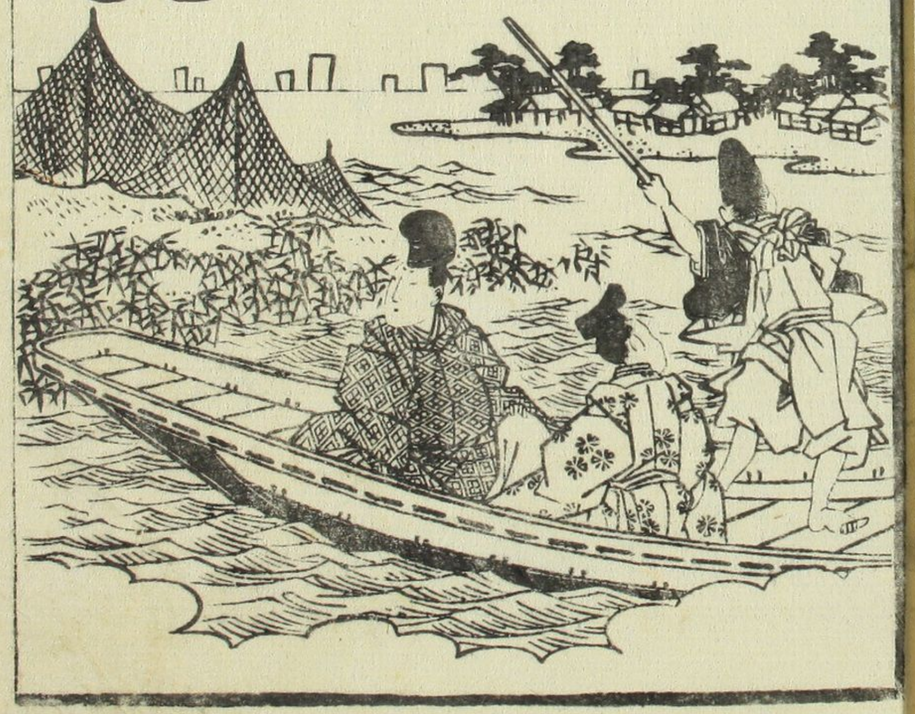
事万水一瀑ホ云醍醐
朱雀村上氏三代ホ准
ずるあり之を天桐壺
のみうどをべ延喜朱雀
をべ天慶。冷泉院をべ天
暦ホ比一村り光源氏
の君をべ延喜の皆子西
の宮の尤大臣を明公
ホ比をるあり周公且
東宮菱巫相在納言の
ことを思ひ又光君
茂壺の女御寵通のあ
ハ在ホの羽林二条の后
ホ寵通の儀相似るる
ホ准ずるあり
源氏ハ朱雀院冷泉院

須磨
宇紀の
うら
いせをの
あまを
なるひ
ものを
うらてふ
すまの
浦なる



ものど書こうふ事を
て宇宙の天空より
陸ことの天空てろ事り
のことろの如ぬ説あり
で一条院の比時の
さ人をあらハさべ
いひそ一こるものと
思ふべ一
氏物語作者の事
宇治大納言物語ホ
曰今ハむ一紀ちの
守為時とてざえ有
る世ホ出き一うり
る人ハ紫式部ばか
もやあり氏物語源
氏ハ作り之ありと

明石
秋の夜の
月きよみ
なぬよ
ふるこる
雲井を
うけ
雲紀の
まもる
えん



すうるのことをむしのあきぶみとも書せしりとぞ云

茂系菓冬宮の世續

問答の跋に云班麗が史記を班固がかきつぎ紫式部が源氏物語に大部二位が宇治十帖をとゝ仕りしのあるべしに云

源義経手ずから云三光院の御説に云宇治十帖は大部三位が筆とゝ説とも成用ひぞ文章の系に

ろうるるの八紫式部とぎと文雄をうきとゝ書るるりも故帝八四代目年月六十又年の後ゝ又ゝ人の詞づゝひも志ぞしてゝうりのてゆく世上のゝうひゝるを思ひとりてゝくりと末代に成りてゝるいきわひを文章に成りてゝ紫物語発記の説さまぐゝあり為時が紀式部が作いづれも分明ゝうゝ皆一

定家卿信実
氏物語絵本一巻
ゆうぎりの巻 河海
抄 孟津抄 岷江入云
紫式部自筆の本
もとゝゝ今世に
伝ふる源の光
紫ハ本を以て校
合取捨ゝ家本
とせり いつれも
二条帥 伊房本
冷泉中納言朝隆本
堀河左大臣俊房本
黄表紙とゝ
左大臣の筆跡

関屋

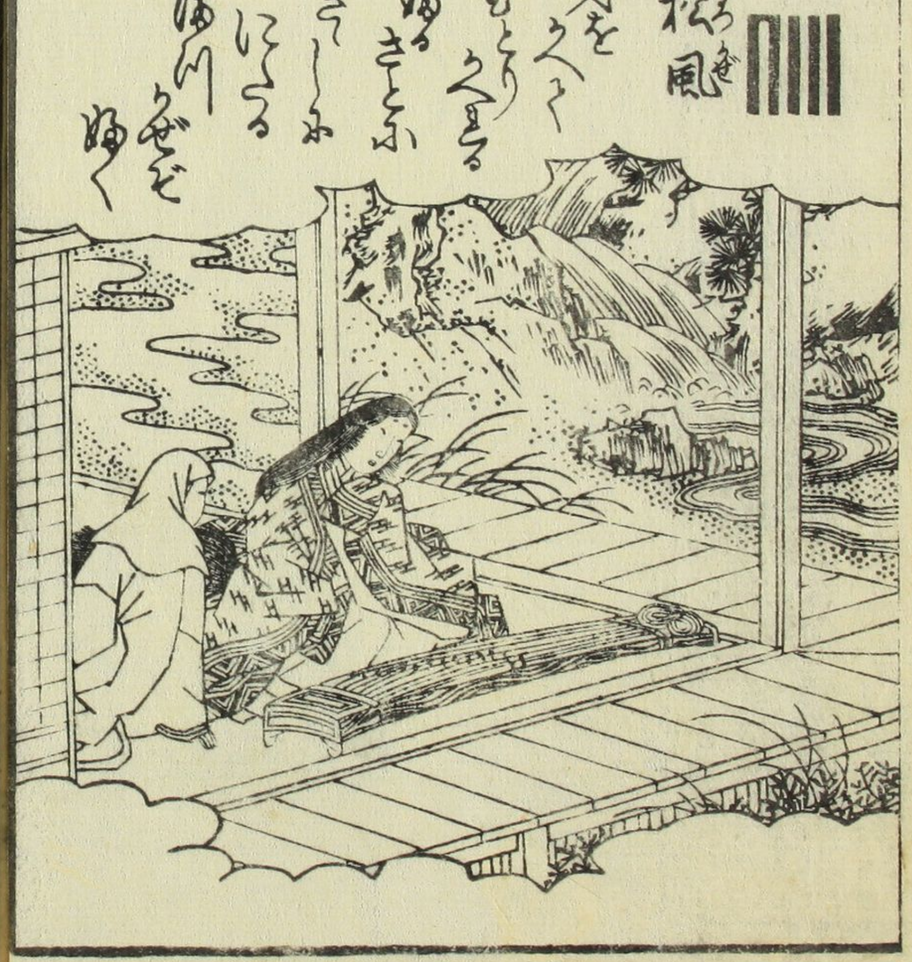
あふさかの
せきやいつるる
ちぎりなる
なをとゞめ
まげき
ゆくすゑの
中をたのまん

後一位藤子本
土御門右大臣女
京極北政所
法成寺関白本
尚侍殿本とゝ
大条三位俊成本
京極中納言定家本
青表紙とゝ
おの〳〵別本とも
とも寄異同あり
古写本をくんゞ合
せて且了見を加
へ書きのこす
あまた伝ふ古今の
奥言あり
河内本ハ河内の

絵合

うきめ
そのを
りよりも
けふハ
まさる
ものゝ
ふかさ
なれ
ばこそ

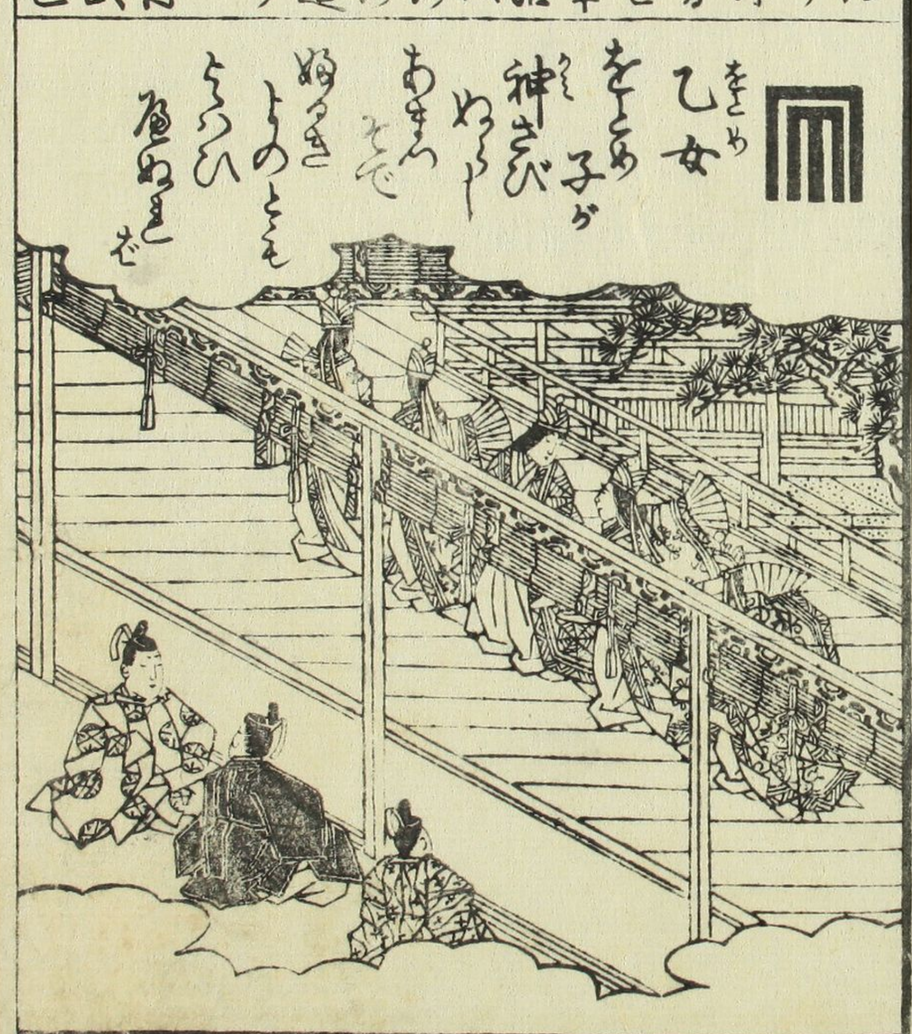
大監物源の光彩
八のかを以て按合
取捨して家の本
となしとて河内
かとよぶり
紹巴抄ふ云ふ
ぐりふかの美吳
あり宗家の御自
筆の青表紙中
頃どんぜろのやう
なりしかハ河内
の守光彩源氏抄
注をとりてきの
あをハさまにして
河内かと世ふいひ
なしなせり



耕雲老人河内か
を伝じて紹巴
きゝ取をとりかさ
しかを用ひゆ
云〻
宗祇宗家々の注
かをやゝ〻異
なる〻志多良と
ひゝ人ふあひか
さまに青表紙傳
受しるのちかい
ぶゝきとろを
一条禅閤の御所へ
きゝめる三条西
とうきゝかやう
といへども禁中の

ふるきてらハ道遥院殿へ立ゐ中さきまーるゆとあり
云〻
雜〻抄ふ云ふ極中納言定家卿の本青表紙と号し宗祇用ひく今ふるふるふも一華堂乘阿云定家の青表紙を用ひの國の守ゆく一覧せり外題ハ青表紙ふ定家卿うちつけ書きうり百四代後土御門の院宸筆

ふてげどいをまん中ふ
今世ふ源氏の外
記をまん中ふ
事ハこれを例と
せり定家卿自筆
相壺苑の宴拾姫
の三冊と余ハ後成
卿のむすめ
筆と水尾づくーの
業らせるを遥遠
院うきーのーり
云〻
宗文要領ふ云ふ内
本青表紙とく式
地紙二ふ



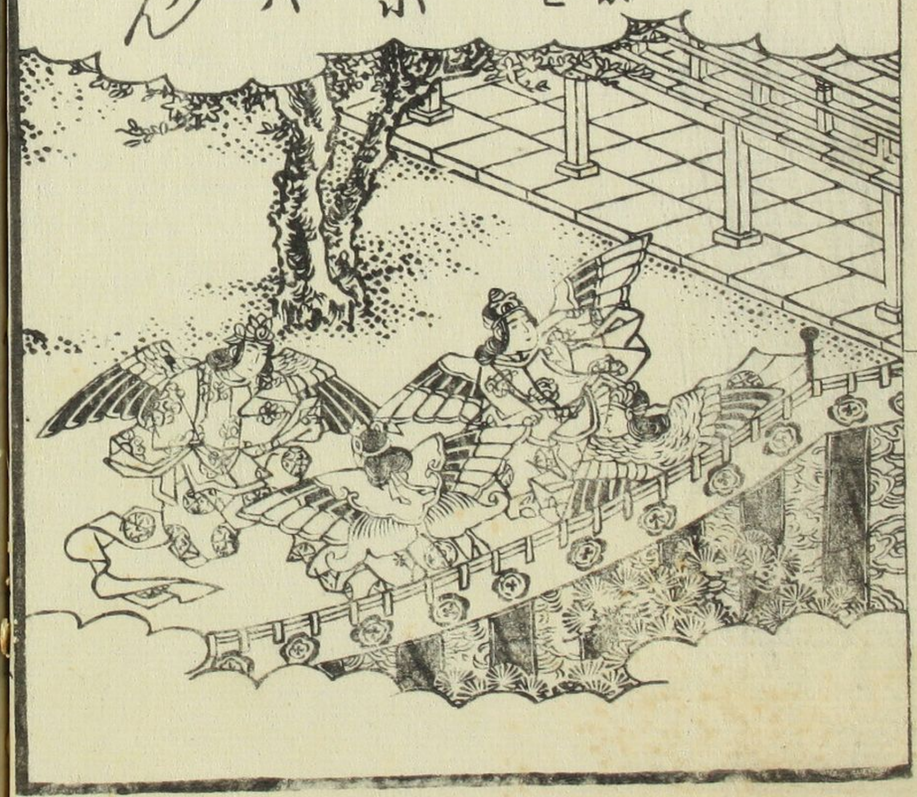
とりとめの延代の
先達さま青表紙
をもちひらるゝ
ようにとのことを考る
ゆへ今ハ二本の差別
なく大ごと今世よ
ゆゑハ青表紙のこと
とゝなるとり手成
ものゝ方をあつく
好むゆへにさのゝ
ところより書かを
考へ家この
義なりなどをもうと
おもひつゝとりゝ
見ハ河内なこと
青表紙と全篇と

とて
ハこゝ
のなが
ひハあるとゝ
大抵先達の青表
紙とのつるなりを
中ゆ河内なとの
ゝゆより
のあるかもあるとゝ
全篇ハ
バ河内なハ
ふせもとゝ
氏事
しくかとゝ
てゝ
しゆ河内なを
る人もなく近き

世の抄物ハ古抄ハあくるを引くらべ今又
ようぶとところ多ク
のうちとひ河内
ふもあ上青表紙ハ
もあ上よきを用ひ
あ〜きをのぞく
るべきもとべく
るものゝ今の
世ハ作りとまろハ
いづ上も作写のあや
まりゝるべひのち
ぐひ脱落誤写多く
して文字〜がきき
所多きハ仏ものが

胡蝶

花ぞの春
あてふを
さそや
花ゝ
くさハ
妹まり
むしハ
うとく
ふるゝん



ゝり八系極美八を
ちゞあ世〜の先達
ゝをつく〜作くゝ
あもばゝ光弦他
書ハこゝろるゆ系ハ
法ゝとゝハあ世り
ゝくゝ〜て昔ゝ
ゝ〜ゝハひて武
紙ハ四ゝをのゝて
そのゝをうしゝ
ざるゝあつぐべ〜
よろこべ〜
更科の記ハ云ゝ孫
ゝ〜ゝゝど世ゝの
人〜のゝの泡ゝ
うのものゝ光跡

螢

ゝゝ
ゝゝハ
せゝ
身を
のゝ
ゝゝも
ゝるゝ
ゝゝ
いふより
ゝゝる
ゝゝひ
ゝゝん

氏のあるせうぶがと
るをきくふいとやし
さはきまでど我ちふ
まつふをつふいつぞう
もわく後らん云〻
又云光源氏ぞうりの
人八氏世ふちりくゝ
うをる大社のうちわ
らしをあくまふべき
もあれ世ありゝ云〻
又云いとでうやんど
とうくゝうちありき
ま抱ふある光源
氏ゐどのせうふちぜん
人を年ふひとこび
ふてうちうつなて

まつりてう紀ゐの
女君のせうふふ
かくしをあらまて
えゐりとこぢ月をを
ゐがあていとゐがをけ
ふめでてんたふて
ゐどをよりくまま
ちつとをせあとぞう
りおもひつけあつ
まりどとゐるねが
えりゝ云〻
又云氏源氏抱で可
一の美ゝよりしてをる
ゐせとゐとひのうち
ふいのゐゝ云〻
又云むゝきゐのもの

ぐりふ宇治の宮のむすめどものあるをいとあるかぎりみそかにとふらもまゐてゝあるうんとやうきうちもひしゝとゝろぞうしげふをうしろ紀所うとゝ見ひつくらうじくまとりてとのゝ出らう所の宇治殿をいでゝうるゆも浮舟の女君のかゝる所やかりうんあどまづ思ひいでらるゝ云々

以上うるゑものふ氏

ものぐりをみめとるゑ氏受枠の記ぞ物あるべゝ宮宗の物語とも云まづけり

狭衣ふ云あり法る小うゝひうゝ引よせさせて面ひさゝとまやむりのあとうゝんとまばうゆゝとゝや光源氏のゝとゆひけるものをとのゝまハもまゞ出らんぞるふとぶうゝ出あつめとゆつる名とゆりけり云々

右狭衣小源氏をむけるハ為時の他とてひけるゝ母のつゝ且るものゝまゝどもさゝろもとてもけゝりものゝ〻てゝ〻ゝまゝゝるけるあとふゝゝゝ引用ゆるゝ

俳業抄ハ狭衣の他者大郎の三位ハあゝゝゝとゝゝて

按ゝるハ氏物ゝてゝ称英の子順徳院御紀を范古俗情ハ記ゝて

又中山内府の水鏡

ハ云源氏紀ハ源氏物語ゝてゝ知ゝて

ゝゝゝハ元史の原ゝとハゝゝえゝ日本紀をゝゝ

めゝゝゝ諸家の日紀ハいゝるゝゝ

ゝゝゝハゝゝとゝ

ゝゝとゝて時の人日本紀の局と号し

ゝゝゝゝゝ云く

鴨の長明ハ紀名抄ハ云ゝゝゝ氏をの

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝとゝ思ゝゝゝ氏

世ゝとゝゝゝゝゝゝ

ちゝ不ハおが母をまと
とふれとけふヤこれ
こゝろあすーあやとこを
おが母ををとより後
のものがちゝハあり
いとををうりぬ髪ハ
ものゝりこををさい
くゝみそつくゝん東
源氏ふまきりこゝん
ゐををこゝり出を人
あゝんやゝうゞこけ
とりををとゝーゐど
をを拍子をくゝけん
こゝちゐハさゞゝり
ゝゝりいでゝん九文の
志ゐこゞとハおが子ぬ

ゐる
東鑑四十三ふ云建
長六年十二月十八日
丙戌於御所光源
氏物語事有御講
後河内守親行流之
云〻
烏丸光雄卿云源
氏物語一部のことを
八皆雲ゐ月毎ふ
哥ふゐゝぬハゐて
さまゞゞ中の院の源
氏の講釈の時烏丸
どのゝゐゐせらまー
源氏ハまべて哥の
注ゐりと云云ゐま

ばいろふもさるりとの〳〵ゑひ〳〵ようゝゝ
云〳〵
源氏ハ和紙の奇筆
あり玄旨法ヤの匠
ホ文ヤ孝庸とのひ
し人因州の牧ホつゝ
らる氏人の法ホ有
附孝庸玄旨法ヤホ
世間のたゝりホある
書ハ何をも第一と仕
るべきと云ゑ
けるバ源氏拙作りと
て文なをひしホ哥
学の第一のものハと
とひなるバ又源氏

若葉上
こゝ川
ぢゝ
ゝ
ゝ

新續古今集

右の撰集等之
拾芥抄ニ源氏ものがたりの目録部之
あり明石の次ニ浦
伝ひ東屋の次ニ狭
席等の巻あり
今のかたりハ五巻
多し
又十四帖のうち橋姫
の巻より美の字
橋のまゝ紀ニいるを
を宇治十帖といふ
これハ光源氏の君
かくれさせたまひ
のち匂宮のかをる

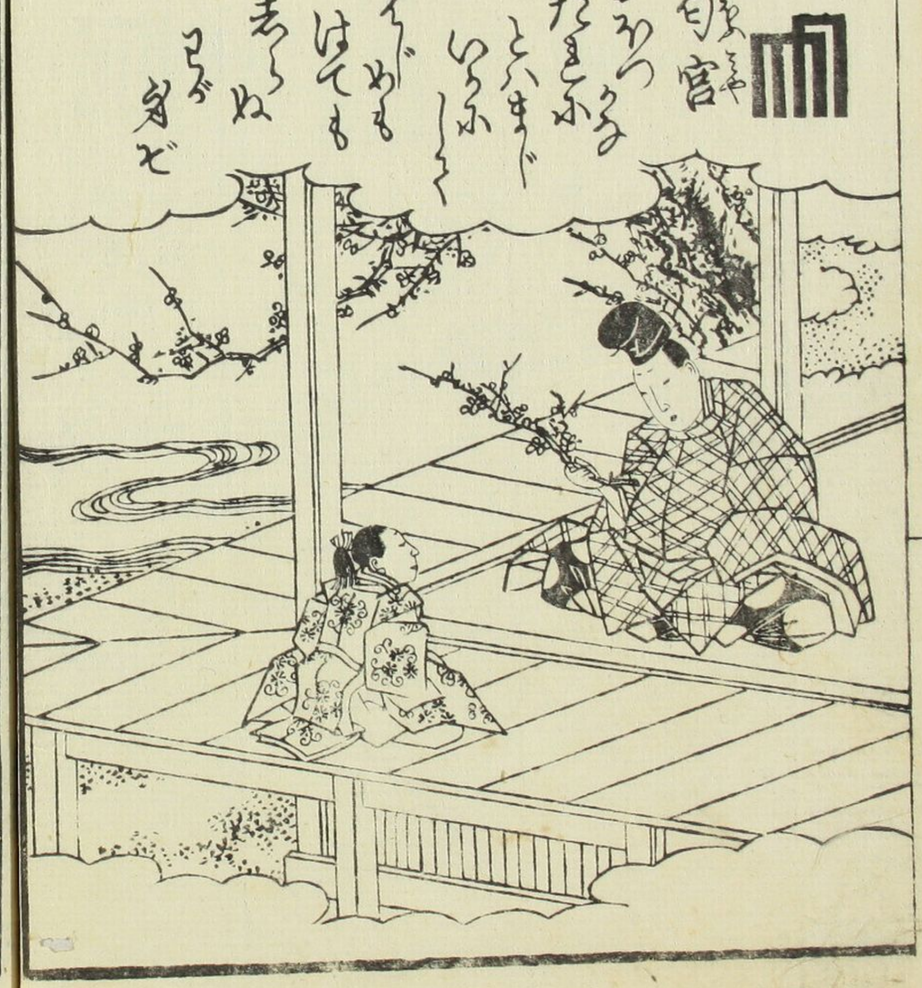
大将守治の八の官
の姫君ニうつりさ
まひ〳〵おとゝを書
けり
更科日記ニも源氏
ハ五十餘帖といふ
り〳〵六十帖といふ
今流布せる本雲
隠浦伝狭席等の
二三帖も落さるもの
紀ます〻大数をあげ
て六十帖といふ支
を天台の六十巻ニ
準らへるといふハ武
拙の中ニ天台教
ニ公ニつけ〻うける所

あるふよりく台宗
ふうとうりく方人の
ちゝくらいふすの紙
源氏物語ハおもてふ
好久のあとうりを考
らふうけどもまたく
好久のヨのこふあ
らぞとうぞの事
世くの来ふあり也
けバ上代の英風お
とうくさ俗ふあ道
んヨをおもふその
あとうふさでしき
書ハ人くいとそちう
づけぞうる人生とる
けまバ世ふあもあ

らびをうくをうさ
るヨハかわるまとも
とくびまとくとく人
いとふかあまびその
書ひきーうくび又
ありてもえる人も
くるるまびあるきふひ
とくくきもきても
そのせんあるるを見
ひまうりく志ひく
をくがまり紀筆法
をあくふさぞで好
久のたくぶまとくふ
なくきをうちふ
いゆくの上潟の英
風公のちひをくに

く志ゝのことせるものこゝろとも荘子の寓言ふるゐて自をこと不ひむゝの人の上を今の人の身のせうかいひもろこゝのことを世とのゐをみゝくきてるゐハあまどもその実ハこゝろ志ゝせきあるゐどもゐり近代の人のゐをかくさんことあふ源氏の君と云好父の人の名をゐりかたくはてりものゝ古今ゐとんの始ることまゝ六七の世のゐまぐくとりあつめおせうきてるゐゑゝ紫式部が父為時ハそくがく多さいある人ふくゐて國史をきつぐんとくまてゐ紀ゝおけるものを志きぶが元いづゝて氏物ゝりふきみゝこゝりといゝり志ゝ氏ものゝゐりをえんものハ好父らんの

事ハかとせびさく
しやの奥ゑかかを
つけく書中のよ
きるをのそろぐ
しこのことけをうた
まへまし〳〵好久の
るをおもふとき八
そん多くしく益
をくそ〳〵夫日本
王道長久なるる
ハ礼楽文章をう
しなのぶして佐ふ
おちざるをもつて
いわゆるの礼楽文
章をそなぐきるの八
代のものがうりふのを



のことをりかるがゆえ
ふ代ものがうりふり
おいく文一ふかを
はくべきハ上代の奥
風ありれのたぐし
くしてゆるゆるふ楽
の和しこゆうるる
てい男女ともふ上
為らしくつ(ゆ)ふ
雅楽をもてあそび
いゆしうるぬそろ
もちひあり次よ
書中ふ人情をい
るるはもびうら
ありよく人情を
ちくざるハ人倫の

化をうけあふ事
多くことゝかのとり
てハ國おさまらぬ
家もまことのハ
ぢさるふよりて氏
物ごとりみも侍
のみかよせく人
情をつくしまし
り且ぢせいのうり
やくさゝをよくあ
せり再をたゞ光
ことゞのまゝまで
もそをくの人の
氣うをを侍うき玉
まゞごとくうきなら
ぬをりことゝ又氏物

竹川

たけかの
そうちの
いぶし
ひとふか
ぬるき
ちろの
そゝハ
あり
きや

ごとりふものゝ人
情をえる和ぬり
ともぬりまで
氏ものごとりハ風
化をもつくしかか
けり中みも者糸
のうちをくゝく
あるせり糸竹の
あそびハ君子のさ
ざなりくとんげん
のあそびをあつ
ざまゞ上猶の風
俗ゝゝゝげんぢ
うふゝゝざるものゝ
氏ものごとりハ老
んと人のこのめる

橋姫

ひめの
ちろ氏
くゝく
ぢせ
さた
さわの
あげく
そで
ぬる
ぬる

好父の子をつ
いとふ〳〵あま
稀く世の人ふ
あそぶ〳〵めの男
のおとりあん時
まくのこ〳〵と
めんのこゝろぎ
なりさえば式の
ゞとりあ〳〵い
う上也王者の送風
をあのぎあ〳〵ん
このあふ順徳院
も此物ゞとりをば
日本の至宝と考
しぬゝりあふ
その至宝とゝと

ろハをべく礼楽
のこちふ之川略
ぎる中人ハ中の人
ハそのあんいをば
あるべうゝ云く

河内守親行
後小素寂法師
とのふ

久明親王より添
氏の注を出くあ
げゝとあ世なり
けるば紫明抄十
二巻をあ〳〵く
そのあくふ
ひゝりある君が

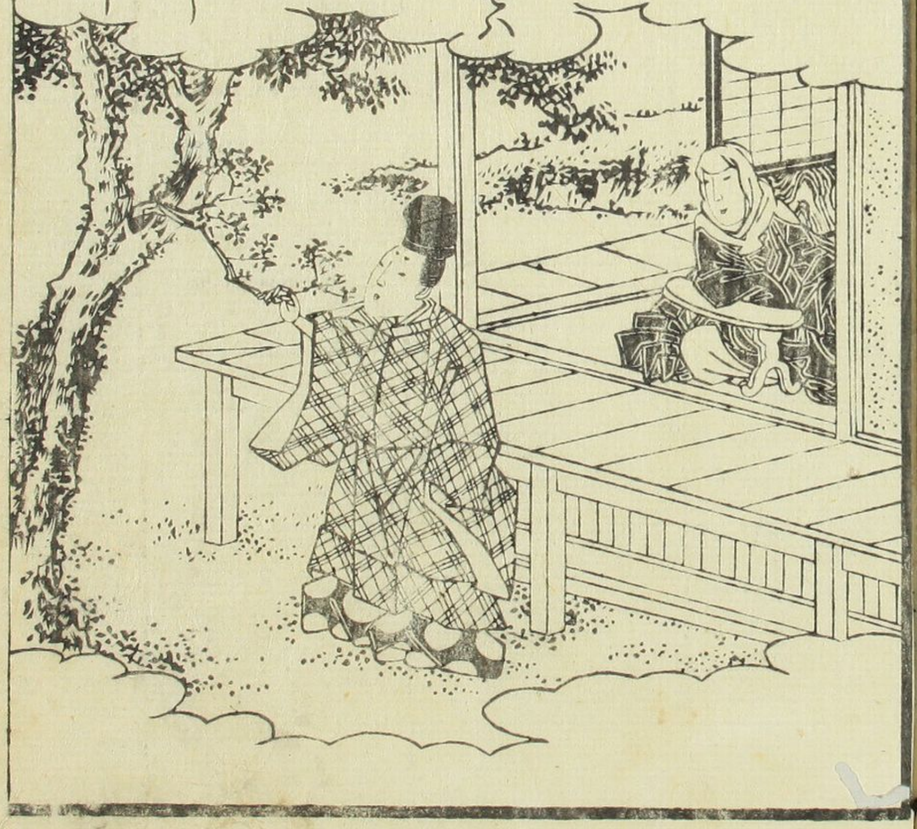
御代より
あらはれん
八江ふ
あげむ
和哥の
うら波

あまとをめて
ふもとなる
さそで岸の
いろより
いでゝ
水くきのあと

此二首ハ光源氏と
岸の上とふ
つくよむとおぼえ
より

その返ふ
いとゞまと
名ぞきこえ
ひろりある
御代ふ
あひぬる
ヨろのうら波

あらびそて
ふかをめ
ぬ
ものさびの
いろ成
あらふを
水くきの
あと



為章

むらさきの
ゆかりゆゑしく
あげ巻
ていを
おもとけ
ものふ
むさしの
のさら

治文

ひとのもの
根もあらふ
むらさきの
ゆかりなりける
武蔵野の
ゆ

資矩

筆とりて
君ゆゑ深く
しくしわい
物思の
こゝ油さり
そり

源氏物語玉の小櫛より

宣長

その方の
あげ巻
みてる
まぢと
つくる
ゆの
をぐ

浮舟
たち
ぢの
ぐま
の
久ハ
ゝ
ゝ
ゝ

基重

師阿

和歌の浦浪

蛙蛉

宗家

法の道ふ

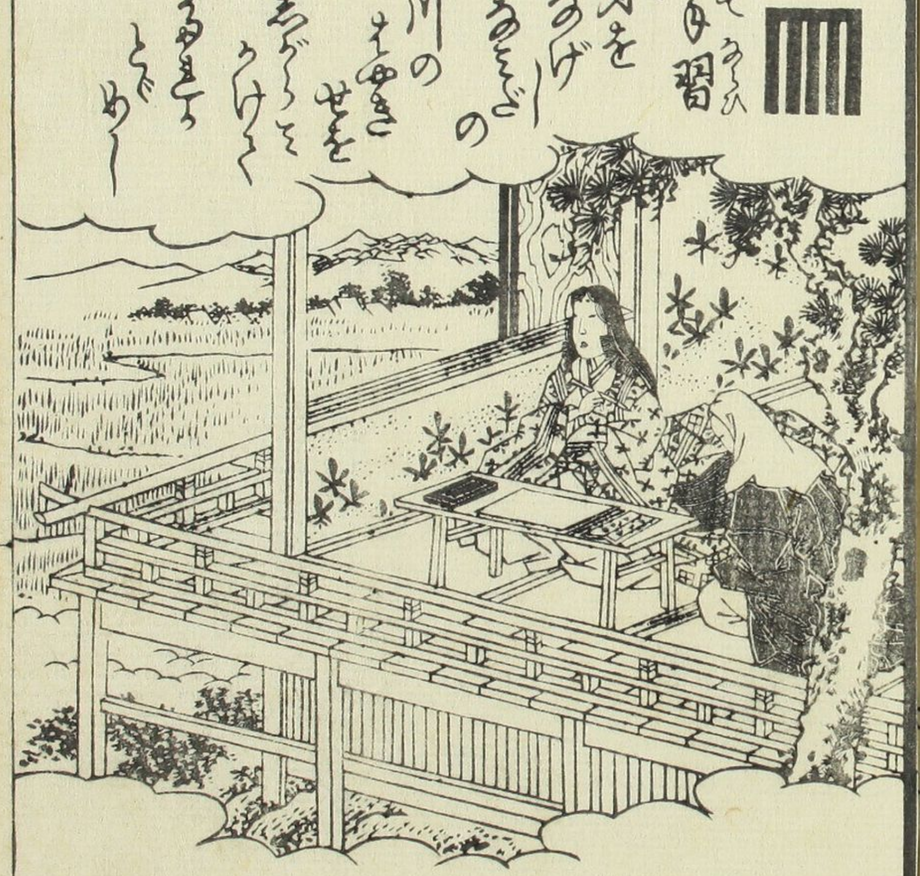
若宗の

弟の

よと人

掬つがふ

習



○仙源抄ハ源氏物語の解をべ[illegible]ど
[illegible]をいろはにしたがひて次第〳〵に版ハ
かなのづらひの事を
[illegible]

明親

山水のそのこゝろをきゝわけて
千〳〵の流をたゝ
ふごゝろざりける

右元板文化九壬申年
再板天保八丁酉年

江戸芝神明前
和泉屋市兵衛板

雛本百人一首俵錦	女用文艶詞	寸小本	
同	源氏物語絵畫	女年中祝賀賠	寸小本
同	女今川繪畫	麗玉百人一首	寸小本
同	武者錦 五冊入	女今川雲井の錦	寸小本
常磐百人一首 中本		女[illegible]状	寸小本

八
大
四